

私の看護師としての生き方

最終

母さん「ごめんなさい…」あなたの子どもでよかった！

私が訪問看護の仕事をはじめたとき「人の命を預かる仕事をするので何かあっても帰れない」と、家族と約束をしたのは26年前。その後、父は脳梗塞、左片麻痺となり、大好きな学校の教師を辞めた。認知症も進み、施設入所をした矢先、トイレで転倒し骨折した。救急搬送され入院となった父は、手術日が決まった前日に急変し、この世を去った。きっと父は手術をするのが嫌だったのだと、家族みんなで父親の死を受け入れた。私は葬儀のみに参加して福島の実家から東京に戻ってきた。



訪問看護を始めた頃、2人の利用者さんから具合が悪く、急変したのでと連絡があり、一人は救急車を呼び、救急搬送を依頼した。私はもう一人の利用者さん宅へ駆けつけ、処置をして落ち着いた。救急搬送された利用者さんも入院し、無事に退院した日に自宅へ訪問すると「あの時、金沢さんは来てくれなかった…」と言われた。その時、私は何があっても自分を犠牲にしても呼ばれたら訪問することを決めた。この仕事に携わり、いまでもあの時のあの言葉が忘れられずとらうまとなり、調布から離れられない状況になった。

福島の実家で田舎暮らしをしている88歳の母は、姪夫婦と一緒に生活をしてきたが、今年に入り、食事する量が極端に減り、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返すようになった。また心臓も半分以上の機能が低下していると主治医から言われていた。いつ急変してもおかしくない状況が続いていて、入院するたびに母は「家に帰りたい…家で死にたい…点滴もしたくない」と、自分の意思をはっきり伝えていた。姪は家に帰りたいと願う母のため、介護休暇を取り、訪問診療、訪問看護を導入し、福祉用具などを整え、自宅へ帰ることを決断した。

私はよく母とケンカばかりをして18歳で家を飛び出し、看護学校へと進んだ。家に帰ることも少なく、母とは電話で話すくらいだった。すぐにでも福島の実家に駆けつけたかったが、私自身の変形性膝関節症の手術と重なり、術後も思うように歩けない、動くことができない状況であり、母とは電話で話すのがやっとの中、「足は大丈夫？」と、かすれる声で私に問いかけた。私も「大丈夫だよ」と安心させ、「私は母さんの子どもで良かった。ありがとう…」と、母への感謝の想いを直接伝えた。

母からは「ありがとう…。私の自慢の娘だったよ…」かすれる声で、最後の一言となった。

訪問看護の仕事をし、何百人もの人の最期に立ち会ったが、人と人との最期に立ち会えることに対して誇りに思っていたが、今一番後悔していることは、両親の死に立ち会えなかったこと。これで良かったのだろうか？と思い、涙が止まらなかった。でもきっと、母なら自分の身内だったら許してくれるだろうと信じている。

私ももう64歳となる。24時間365日の電話での対応にも、身体的、精神的に限界を感じていたため、後輩にバトンタッチしていき、新たな体制づくりをしていきたい。これまで、ありがとうございました。

令和5年10月31日 金沢 二美枝



エイサーって…
沖縄の民謡
だったよね

俺たちも
なかなか
リズム感あるだろ〜♪



秋祭り



たのしむぞ〜



今年も行ってきました！
緑ヶ丘一丁目自治会
秋の集い



まあ〜
皆さん ホント
お上手ね！



エイサー
サイコー！



私も
上手に 太鼓
叩けるわよ〜



沖縄エイサーを踊ったり ビンゴ大会で商品 Get したり秋祭りを思いっきり楽しみました！